

「読みがたり」に登場する“鬼”

—子どもに語る昔話から—

“Oni” in the story of “Yomigatari”

—from folk tales for children—

林 鎮 代*
Shizuyo HAYASHI

抄録

日本の昔話には，“人にあらざるもの”がいろいろと登場する。“天狗”，“河童”，“大蛇”，“鬼”等である。とりわけ，“鬼”は，恐ろしい存在として子どもに伝えられてきた。“鬼”の話には，同じ話が複数の地域にある場合と，その地域にのみある場合とがある。そうした昔話を教育現場で活用しようと，再編集したものが「読みがたり」である。「読みがたり」の話は，おおよそ基本に従って分類されているが，中には同じ話が異なって分類されている場合もある。これは，子どもに伝えたい教育的内容が異なったことから分類も異なったものと思われる。

“鬼”は，長きにわたり『避けるべきもの』『退治すべきもの』と子どもに伝えられてきた。しかし，近年のグローバル社会化を受けて『多様性を認めよう』『相手の立場を思いやろう』と“鬼”を通して伝えることも変化してきた。今後も，“鬼”は生き続ける限り変化していくであろう。

Abstract

In Japanese folk tales, there appears a variety of “non-human beings”. They include “Tengu”, “Kappa”, “Orochi” and “Oni”. Above all, “Oni,” as has been told, means fear. While some stories of “Oni” are told in several areas, some other stories are told in specific areas. In order to utilize such folk tales in education, “Yomigatari” has been re-edited. Although in most cases, stories of “Yomigatari” are categorized subject to a basis, in some cases same stories are categorized differently. It is considered that as the educational contents purposed to tell children are different, the categories are also different. “Oni” has been told as “beings to be avoided” or “beings to be wiped out” for a long time. But in reaction to globalization in recent years, the messages expressed through “Oni” have been changed to “Let’s accept diversity” and/or “Let’s think of opponent’s situation”. In the future, “Oni’s” role will keep changing as long as it exists.

* 関西国際大学教育学部

1. 「読みがたり」の中の“鬼”

1.1 「読みがたり」

子どもは、お話が大好きである。教育や保育の現場でも、子どもにお話を語って聞かせることは長く行われてきた。昔話は、その中でも代表的なものといえる。

日本の昔話は北海道から沖縄に至るまで各地で語り継がれてきており、それらをまとめたものとしては、古くは、「日本昔話名彙」¹⁾(柳田国男：監修1948年)・「日本昔話集成」²⁾(関敬語：著1950-1958年)・「日本昔話大成」³⁾(関敬吾：著1978-1980年)「日本昔話通観」⁴⁾(稲田浩二・小澤俊夫：責任編集1979年)が有名である。これらは、大人のために編集されたものである。子どものために読みやすく編集されたものの一つとしては、全都道府県名を入れ込んだ「読みがたり ○○の昔話」^{5~51)} 47巻がある。

「読みがたり ○○の昔話」^{5~51)} 47巻は、2004年から2005年にかけて誕生した。それらは、以前から地方にあった昔話集(1974年頃の初版本)を再編集したものであり、編集にあたったのは各県の小学校教育研究会国語部会・学校図書館協会・民話研究会等と名付けられた教育に関係した組織であった。こうしたことから、子どもを対象としての昔話の活用を意図として再編集が行われたことが分かる。大きな組織による再編集作業において、作業の過程でごく限られた地域のあまり一般に知られていない“鬼”の話などが、編集から漏れてしまう可能性は十分に考えられる。しかし、全国の教育関係者が組織的に「読みがたり」を作成する中で編集に組み込まれなかったのは、それらの話が収録された作品に比較してそれ以上の価値や意味が見出せなかったということでもありと考えられる。そうしたことから、「読みがたり ○○の昔話」^{5~51)} 47巻には、子どもへ教育的意図をもった十分な昔話が収録されていると考えて良いと言えよう。本研究での「読みがたり」は、「読みがたり ○○の昔話」^{5~51)} 47巻のこととする。

1.2 「読みがたり」の分類

昔話の分類方法には、いくつかがある。世界で最も有名なのは、アールネ&トンプソンの「昔話の型 (Types Of Folktale)」(1928年)(略称 AT)である。ここでは世界中の話が5種類に分類され、それぞれ、①動物譚、②通常の昔話、③冗談と逸話、④形式話、⑤その他の話、とされている。日本の最初の昔話の分類では、柳田国男監修の「日本昔話名彙」¹⁾(1948年)での2種類に分類されたもので、①完全昔話(神話の直系となるもの)、②派生昔話(完全昔話の構成要素の一部が派生独立したもの)がある。他に、関敬語の「日本昔話集成」²⁾(1950-1958年)では、アールネ&トンプソンの「昔話の型 (Types Of Folktale)」を参考にして考えられた4種類で、①動物物語、②本格昔話、③笑い話、④形式譚、となっており、稲田浩二・小澤俊夫の「日本昔話通観」⁴⁾(1979年)の第28巻『昔話タイプ・インデックス』(1988年)(略称 IT)でも4種類に分け、①むかし語り、②動物昔話、③笑い話、④形式話、としている。分類された中には、さらに多くの話型 (Type) がある。話型とは、話を構成するいろいろなモチーフをさし、それらのモチーフが同じであればその順序に関係なく同じ「話型」と認定され、「日本昔話通観」⁴⁾には1211の話型がある。

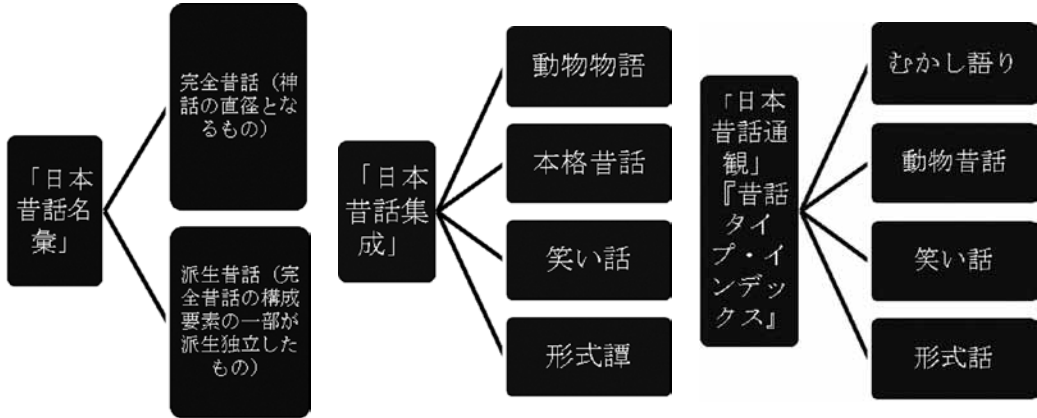


図1 「日本昔話名彙」の分類

図2 「日本昔話集成」の分類

図3 「日本昔話通観」の分類

「読みがたり」の分類方法については、「日本昔話集成」²⁾と「日本昔話通観」⁴⁾の分類を基本として考えられたようである。しかし、実際に収録した昔話を分類する時、全てをその通りにはできてはいない。特に、子どもに「読みがたり」すること、さらにその後は子どもが自分で読む場合もあることを考慮すると、分類にも教育的配慮が必要とされる。特定の昔話で、子どもに何を伝えようとしているかに重点を置いて分類されることとなる。その結果、分類の項目は《しあわせになった話とばちのあたった話・動物の話・ふしぎな話とかわいそうな話・めでたしめでたしの話・こわい話・ゆかいな話とこっけいな話》(岩手県)、《動物むかしあったとき・ふしぎばなしがあったとき・こないわれがあったとき・大きな話があったとき・こわーいはなしがあったとき・江戸のまちであったとき・とんちとちえがあったとき・わらいばなしがあったとき》(東京都)、《動物の話・めでたしめでたしの話・こわい話・ふしぎな話・ゆかいな話こっけいな話》(岡山県)などのように、地域で様々な分類がなされている。また、昔話の内容による分類でなく《南加賀の話・北加賀の話・口能登の話・奥能登の話》(石川県)のように地区で分類している地域や、中には分類そのものがなされなかった地域(山口県)もあった。こうした子どもへの教育的意義を主体とした考えの分類は、“鬼”の話においても同様に考えられた。“鬼”の登場する代表的な昔話である「桃太郎」も、東京都では《動物むかしあったとき》、富山県と岡山県では《めでたしめでたしの話》というように、子どもへの教育の活用意図によってそれぞれの地域で異なった分類がされている。

2. 「読みがたり」に登場する“鬼”

2.1 “鬼”の登場

「象徴としての“鬼”と“トッケビ”」⁵²⁾で明らかにされた“鬼”のもつ効用(インパクトの強さ、ワクワク感、躰、成長へのあこがれなど)は、昔話の登場人物として大きな魅力であることは十分に理解できる。しかし、昔話には“鬼”の他にも、“鬼”と同様に“人にあらざるもの”が登場する。「読みがたり ○○の昔話」^{5~51)}47巻の中にも、様々なものが登場している。

- ・(動物) 犬, 猿, 狐, 狸, ムジナ, 亀, 牛, 馬, 熊, カワウソ, 鼠, 猫, モグラ, 兎, 狼, 熊, 蛙, 鹿, 虎, 狒々, ハブ, 蛇
- ・(鳥) 雉, 鶏, 白鳥, 鶴, マオ鳥, 雀, 不如帰, ミスクグリ, 鴨, キツツキ, カラス, 雲雀, 鳩, 鴛, ケラツツキ, ヒヨドリ, 鶺鴒, シジユウガラ, 鷹, 雁, 鶯, 百舌鳥, 鶯
- ・(魚介類) 鯨, 鮑, 海老, 鮭, 秋刀魚, 蟹, 蛸, 田螺, ツブ, クラゲ, 山女, 鰻, 鯖, エイ, 鯰, 鱈, オコゼ, 鱈
- ・(虫類) 蜂, 蟻, ミミズ, 蝉, 蚤, 蜘蛛, 虻, 蝶, 百足

多種類の身近な生き物が、昔話には登場している。身近というだけに地域性の表れたものも多く、北海道では“熊”や“鮭”の話が多く、“ハブ”は沖縄県で語られている。東北地方の山間地域では“狐”の登場頻度が高く、“海老”や“エイ”は瀬戸内海地方で登場している。昔話が日々の生活に根差して語り継がれてきたことが、こうした登場するものからも分かる。

動物以外にも農作物等が多く取り上げられているのは、農耕民族が大半を占めていた日本ならではの特徴と言えるのではないであろうか。

- ・(植物) 蕎麦, 芋, 豆, かぼちゃ, 瓜, エノキ, 蕨, 栗, 筍, 米, 茶,

農耕の庶民は雑穀中心の食生活であり、米は貴重な贅沢品で有ったことが話の内容からも分かる。その他にも食べられるものではないが、松、さくら、ほおずき、菊、杉などの植物も登場し、人々の暮らしにとって意味をもった大切な存在であった。

“人にあらざるもの”で、“鬼”と一部分似た存在を示しているものとして、“天狗”“河童”“龍(おろち, 大蛇など)”がある。

“天狗”は、もともとは山伏信仰と相まって人々が山地を異界として畏怖し、そこで起きる怪異な現象を天狗の仕業と呼んだことから生まれた。それゆえに、山で修行している山伏と同じような服装で山中に暮らしているとされ、赤ら顔に高い鼻が一番の特徴である。“天狗”は「隠れの蓑」と「葉団扇」をもち、不思議な力を持っている。恐れられているが、特に人間に悪さをするわけではない。

“河童”は、川や池などの水中に住み、背中に亀のような甲羅をつけ、頭に水を入れた皿を乗せ、胡瓜を好物とする。川や池の深みにある“河童”の住処に子どもなどが近づくと、水の中に引き込むという。そのため、人々は時々胡瓜を投げ込んで、子どもを引き込まないようにお願いをする。また、頭の皿の水が乾くと神通力がなくなるので、陸にはほとんど上がってはこない。

“龍(おろち, 大蛇など)”は、もともと水田の水の守り神である。湖の深い淵等に住み、水を汚したり、堰を壊したりする人間を攻撃する。日照りのときには、お祈りすると雨を降らせてくれる水神でもある。



図4 やまたのおろち(岩波書店)⁵³⁾



図5 「桃太郎」の鬼(福音館書店)⁵⁴⁾

“鬼”は、一本または二本の角を頭に生やし、見上げるような大きな体は赤や青や黒の色をしていて、毛深く力は強い。衣服として、虎などの獣の皮を腰にまとっている。昔話の中の“鬼”は、山奥に住まい、村に来ては食べ物や財産、娘をさらっていく存在である。

“鬼”“天狗”“河童”“龍(おろち、大蛇など)”は、全て“人にあらざるもの”であり、人々に恐れられている存在という共通点をもつ。しかし、“鬼”と“天狗”“河童”“龍(おろち、大蛇など)”の間には、決定的な違いがある。大人が子どもに昔話を語る時、子どもへの期待が込められていることは「象徴としての“鬼”と“トッケビ”」⁵²⁾に記載されている。その視点から見ると、“天狗”は『夜暗くなるまで山にいと、怖い目に会うよ。(道に迷ったり、狼に襲われる危険がある)』という警告であり、“河童”も同様に『水の深みに行くと、溺れたり流されて死んでしまうよ。』と警告し、“龍(おろち、大蛇など)”も『水を粗末にすると、龍の水神様が怒るよ(生活の命の水を大切に守ろう)』とのメッセージが読み取れる。“天狗”“河童”“龍(おろち、大蛇など)”は、子どもが警告を受け止め、気をつけていれば、厄災は避けられるものであることが分かる。

では、“鬼”も同様にしていれば厄災は避けられるのであろうか。

崔⁵⁵⁾は「日本の鬼は、角があって肌が赤色や青色で、怖く、人に直接的な被害を与える」と述べている。「山で道に迷う」「川で溺れる」「水田の水が不足する」という間接的な影響でなく、“鬼”は、「人に直接的な被害を与える(盗む。さらう。殺す。)」のである。“鬼”に対しては、警戒心や人間の持つ力、決められた約束事を守るというだけでは、厄災を避けえないのである。主導権は“鬼”にあり、人間の力ではどうしようもない厄災が、いきなり降りかかるのである。こうした人間の“鬼”への絶望と恐怖と怒りが、“鬼”の登場する昔話の根底に存在する。こうした“鬼”の特質により、“鬼”の登場する昔話には、他の“人にあらざるもの”{“鬼”“天狗”“河童”“龍(おろち、大蛇など)"}とは異なった一層の強いインパクトが加えられることになる。“鬼”を登場させる意味は、ここにあると言えよう。

2.2 “鬼”の住むところ

「読みがたり」は、もともと全国にあった昔話を再編集したものである。多くは、1974年頃の初版を2004～2005年頃にかけて再編集し全国的に出版されている。

“鬼”の話は、「地獄めぐり」「桃太郎」「一寸法師」のように全国共通の同じ話が伝わっているものと、その地域でのみ伝わっている話とがある。

全国共通の昔話では「むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんが・・・」というように語られている場合がほとんどである。時代も場所も人物も特定されていないので、どの地域の話であってもかまわない。話の内容は、次の通りである。

【鬼の登場する全国に共通する昔話の内容】

- ・「地獄巡り」（内容：鍛冶屋と医者と山伏が地獄見物に出かけ、それぞれの特技を生かして地獄の鬼達を懲らしめ、とうとう鬼に帰ってくれと言わせる愉快な話。）
- ・「桃太郎」（内容：桃から生まれた桃太郎は、成長すると人々に悪さを働く鬼ヶ島の鬼退治に出かける。桃太郎は、途中で出会った犬、猿、雉にきび団子を与えて家来にする。鬼を退治した桃太郎は鬼の宝物を持って村に帰り、おじいさんとおばあさんと幸せに暮らす。）
- ・「三枚のお札」（内容：山に栗拾いに行く小僧に、和尚さんは三枚のお札を渡す。暗くなり鬼婆の家に泊まった小僧は鬼婆に食べられそうになるが、三枚のお札の不思議な力に助けられて逃げ帰る。）
- ・「喰わず女房」（内容：あるところに、米が惜しくて女房をもらわない男がいた。そこへ、ご飯は喰わないという女房が現れ結婚するが、米がよく減る。男がそっと見ると、女房が頭の中の口でご飯を大量に食べている。男が離婚を切り出すと、女房は鬼婆になって男をさらい、子どもに食べさせようとする。男は、鬼婆の苦手なヨモギや菖蒲の中を通過して逃げた。）
- ・「一寸法師」（内容：小さく生まれて一寸法師と呼ばれる男が、川を下って都に行く。都の姫をさらう鬼を針の刀で退治し、鬼の宝の「打ち出の小槌」を奪う。「打ち出の小槌」で大きく変身した一寸法師は姫と結婚し、村からおじいさんとおばあさんを呼び寄せて幸せに暮らす。）

こうした全国共通の昔話は「読みがたり ○○の昔話」^{5～51)}を見ると、日本の複数の地域に伝えられている。複数の地域に伝えられている昔話として、「地獄巡り」（宮城県、奈良県、徳島県、長崎県、熊本県）、「桃太郎」（栃木県、富山県、東京都、岡山県、香川県）、「三枚のお札」（青森県、宮城県、山形県）、「喰わず女房」（長野県、鳥取県、愛媛県）、「一寸法師」（京都府、大阪府）などがあげられる。また、その場合は話の内容は同じであっても、地域によって題名が様々で異なっている場合も見られた。例えば「地獄巡り」を取り上げてみると、宮城県と奈良県ではそのままの題名であるが、その他では「地獄もどしの三人」（徳島県）、「鬼に飲まれたでえどんたち」（長崎県）、「医者どんと山法師と軽業師」（熊本県）の題名となっているが、どれも話の内容は同じである。また、「三枚のお札」も、現在ではこれが一般的題名とされているが、地域によっては「たんこと鬼婆」（青森県）、「小僧と鬼婆」（宮城県）、「三枚のお札と鬼婆」（山形県）となっている。なお、一般的な絵本などでみると、「三枚のお札」では小僧を食べようとするのは「山姥」とされているが、これらの話の中では「鬼婆」となっている。

一方、地域限定の昔話では、その地域の特定の場所や岩や山、また風習などのいわれに“鬼”が登場するものである。「○○半島」「○○山」「○○岩」「○○の誰それ」など、地域の場所や物、人物が明確に記述しており、他の地域の話ではありえないものである。そうした昔話の内容の例として、次のようなものがあげられる。

【鬼の登場する地域限定の昔話の内容】

- ・岩手県「鬼岩」（内容：御箱崎半島の北から鬼がホタテを取りに来る。岩投げの力比べに負けて鬼は山に逃げる。）
- ・群馬県「鬼と長いも」（内容：白根山と四阿山に住む鬼は悪さばかりしていた。5月の節句に、村男が妻に長芋を摺ってとろろ汁を作るよう言いつける。鬼はそれを見て、自分の角を折り摺り下ろそうとするが、固くて出来ない。おいしそうにとろろ汁を食べる夫婦を見て、鬼は自分を食べられては大変と山からいなくなった。それから長芋は鬼払いといって、度々作られるようになった。）
- ・岡山県「鬼の手形岩」（内容：遥照山の鬼が、岩を投げて遊んでいて岩が道の真ん中に落ちた。村人が困っているのを聞いて鬼は元に戻そうと何度も投げてやっと戻したが、その岩には鬼の手の形がついていた。）
- ・福岡県「鬼の石運び」（内容：久留米の高良山に大勢の鬼が住み暴れていた。大明神は竹内宿弥（すくね）に鬼退治を命ずる。宿弥は鬼に一晩で高根山の周囲を石で囲えたら高良山に住んで良いという。鬼が成し遂げそうになると、宿根は鶏の鳴き真似をして鬼を追い払う。）

以上のように、いろいろな昔話に“鬼”の登場する地域は多いが、中には“鬼”が登場しない地域もある。かみなり（雷神）や山姥（鬼婆）が登場する場合もあり、“鬼”との区別が難しいものもあった。「妹は鬼」⁵⁰⁾のように、女性の鬼もいる。しかし、「食わず女房」でも、女房がいきなり変貌する時に“鬼”になったことを明確に文章化しているものと、それらしく文章表現しているが“鬼”と言いきっていない点で分類に迷いながらも、その内容から“鬼”の登場する昔話に分類した。“山姥（鬼婆）”の場合も同様である。

このほかに“鬼”の登場する話の分類で難しかったのは、「鬼の金六」（東京都）のように直接的に“鬼”自体は登場せずに、金六が“鬼”のような面相であったり“鬼”のように強かったりした話である。しかし、「千葉わらい」（千葉県）や「鬼の面」（兵庫県）でも直接“鬼”は登場せずに、“鬼”は『面』としてだけ登場する。こうしたことから、直接的に“鬼”が活動することはなくても、“鬼”は形を変えて話の中で重要な意味を持っていることから“鬼”の登場する昔話に加えることとした。

“鬼”の話は、どの地域でどれだけ語られていたのか。地図で“鬼”の昔話の語られた地域とその数を示したものが、図6である。

2.3 “鬼”の話が伝えるもの

「地獄巡り」のように、広範囲で語り継がれている“鬼”の話と、特定の地域の場所や習わしと結び付いた地域限定とも言える“鬼”の話とがあった。これらの“鬼”の話には「象徴としての“鬼”と“トッケビ”」⁵²⁾で明らかにされたように、子どもに伝えたいことや子どもに期待することなどが込められている。

“鬼”とは、人々にとって『受け入れがたい異質な存在であり、対立する関係』⁵²⁾であり、『“鬼”は交流することはもちろん、近づくこともまかりならない、全き悪の象徴』⁵²⁾なのである。子どもにとって『受け入れがたい異質性』と『全き悪の象徴』は、とてつもなく恐ろしいものであったことは想像に難くない。

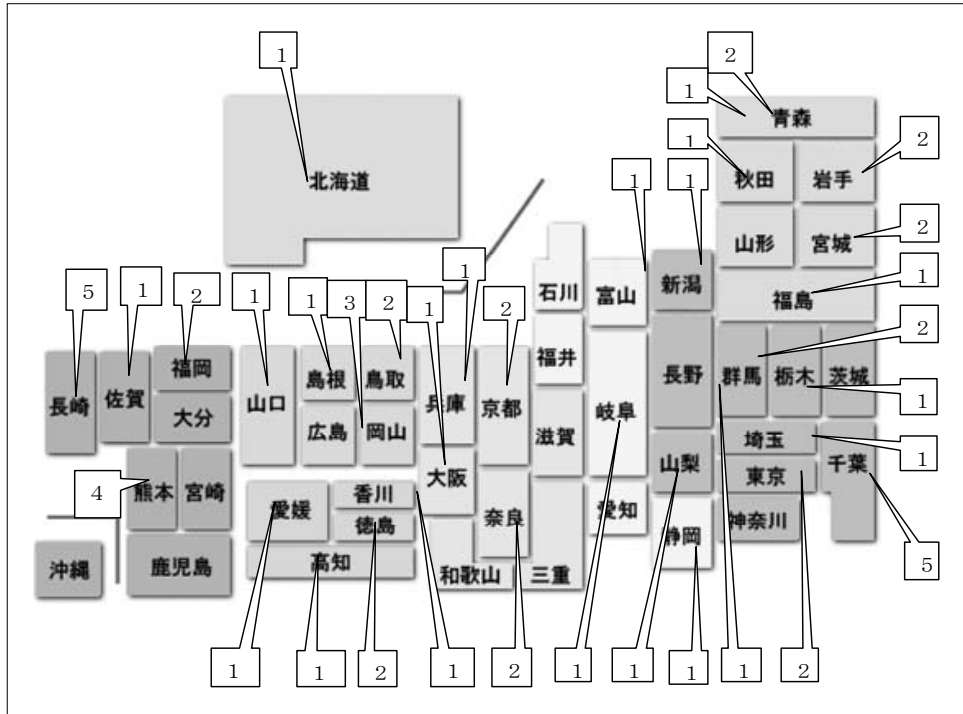


図6 “鬼”の登場する昔話の地域と数

ここで、子どもたちに伝え期待することは、『子どもに、躰として、教訓として、“鬼”への対応の教育を昔話の中で繰り返し伝える』⁵²⁾ ことであった。力の弱い子どもには、『昔話の中で機転を働かせた「利口者」「知恵者」を手本に，“鬼”と戦い、あるいは逃れる』⁵²⁾ ことが求められた。四方を海に囲まれた日本では、あらゆるところから異質者としての“鬼”が、来訪している。図6で見ると、特に千葉県・長崎県（5話）、熊本県（4話）、岡山県（3話）に多く訪れたようである。“鬼”の話が多くあると、怖い話ばかりでなく滑稽な話も混ざるようになる。また、似たパターンのお話も見られる。「鬼が笑う」のパターンは、「おどけ鬼の子」（千葉県）・「鬼を笑わせたばあさん」（岡山県）に共通している。「鬼が笑った話」（熊本県）は、『来年のことを言うと鬼が笑う』という落ちがかった内容で、「鬼が笑う」のパターンとは異なっている。しかし、怖い話も滑稽な話も、最後は人間側の勝利で終わっている。人間は圧倒的な数と時間をもつ体制側であり、“鬼”は居場所を持たない異端のマイノリティーである。それゆえに、その強い腕力等で一時的に勝利しても、継続は難しい。力では敵わない人間（特に幼児や女性、老人）は、踊りや鳴き声、とんちなどで“鬼”に対抗せよと昔話は教えている。（「下北むがしっこ」：青森県、「大工と鬼六」：岩手県、「鬼と長いも」：群馬県、「鬼と神力棒」：埼玉県、「地藏にだんご」「おどけ鬼の子」「かまいたち」：千葉県、「継子の幸せ」：山梨県、「オニとツバキの花」：岐阜県、「鬼鉄砲」：静岡県、「大江山の鬼退治」：京都府、「鬼の面」：兵庫県、「とんでにげた鬼」：島根県、「鬼の石運び」「平尾台の鬼」：福岡県、「鬼の鼻」：佐賀県、「泣く浜」：長崎県、「鬼が笑った話」：熊本県）

“鬼”から命や生活を守るために、幼少期には逃げるすべを教え、成長した折には退治する方法を教えたのが“鬼”の昔話であったといえよう。そうした中で、「鬼の田植え」（新潟県）（内

容：夜のうちに田植えを手伝う鬼が、朝人間に見つかり慌てて岩に顔をぶつけて青アザを作り青鬼になった。)は、“鬼”側に心を寄せた唯一の話であった。ここから、新潟県では節分には「鬼は内」というようになったという。共存とまではいなくても、“鬼”への感謝の気持ちが表れた貴重な話である。北陸の厳しい自然の中で、貧苦や飢饉など苦労や哀しみの絶えなかったであろう農民は、“鬼”の生きていく苦労や報われない悲しみが我がことのように理解できたのではないであろうか。ここでは、相手の立場に思いを寄せる優しさが伝わってくる。“鬼”は、様々な子どもに語りかけていると言えよう。

3. まとめ

「読みがたり」の中の“鬼”の話に込められた子どもへの願いや期待は、昔では当然のことであったであろう。そのための怖い話であり、滑稽な話である。子どもは、素直に恐れたり、ワクワクと心を躍らせたり、笑い転げたりして昔話を楽しむ。楽しむことで、教育効果は高まるのである。

しかし、鬼が笑う話はなぜか切ない読後感を持つ。周囲の人に受け入れられずに、四面楚歌の中で生きることを余儀なくされる“鬼”の存在を浮き立たせる。“鬼”の笑いは、幸せに繋がっていかない。笑いは瞬時の滑稽さであったり、つかの間のごまかしであったりする。“鬼”が自らの強い力を活かして人間社会に貢献することで、何とか自分の居場所を認めてもらおうとするが、常に鶏の鳴き声などで騙されて約束はほごにされる。そうした“鬼”の哀しみに目を向けることは、長い期間されることはなかった。しかし、近年ではグローバル社会となり、互いの違いを認め合って、相手の立場で考えることのできる子どもの育成が望まれるようになった。子どもに伝えたい内容が変化したことで、近年では「泣いた赤おに」⁵⁷⁾「おにたのぼうし」⁵⁸⁾のように“鬼”に思いを寄せた創作童話が出版されるようになった。

今後も、“鬼”はお話の世界に生き続けることと思われる。そして、“鬼”を通じて子どもに伝える事柄も、時と共に変化し続けるであろう。それにつれて、“鬼”の表現のされ方も、時と共に変化し続けることになる。変化とは、命あるものにとって必然のことであるからである。

【注・引用文献・参考文献】

- 1) 柳田国男：監修「日本昔話名彙」日本放送出版協会 1948
- 2) 関敬吾：著「日本昔話集成」角川書店 1950-1958
- 3) 関敬吾：著「日本昔話大成」角川書店 1978-1980
- 4) 稲田浩二・小澤俊夫：責任編集「日本昔話通観」同朋舎 1979
- 5) 北海道むかし話研究会・北海道学校図書館協会：読みがたり「北海道のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 6) 青森県小学校国語研究会：読みがたり「青森のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 7) 岩手県小学校国語教育研究会：読みがたり「岩手のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 8) 「宮城の昔話」刊行委員会：読みがたり「宮城のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 9) 秋田県国語教育研究会・県学校図書館協会：読みがたり「秋田のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 10) とんと昔の会・山形県国語教育研究会：読みがたり「山形のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 11) 福島県国語教育研究会：読みがたり「福島のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 12) 茨城民族学会：読みがたり「茨城のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004

- 13) 下野民族研究会：読みがたり「栃木のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 14) 群馬のむかし話研究会：読みがたり「群馬のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 15) 埼玉県国語教育研究会：読みがたり「埼玉のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 16) 「千葉のむかし話」編集委員会：読みがたり「千葉のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 17) 東京むかし話の会：読みがたり「東京のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 18) 相模民族学会：読みがたり「神奈川のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 19) 新潟県小学校図書館協議会：読みがたり「新潟のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 20) 富山県児童文学研究会：読みがたり「富山のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 21) 石川県児童文化研究会：読みがたり「石川のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 22) 福井県民話研究会：読みがたり「福井のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 23) 山梨国語教育研究会：読みがたり「山梨のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 24) 長野県国語教育学会：読みがたり「長野のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 25) 岐阜県児童文学研究会：読みがたり「岐阜のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 26) 昔話研究会：読みがたり「静岡のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 27) 愛知昔話の会：読みがたり「愛知のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2006
- 28) 三重県小学校国語教育研究会：読みがたり「三重のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 29) 滋賀県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「滋賀のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 30) 京都の昔話研究会：読みがたり「京都のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 31) 大阪府小学校国語科教育研究会・「大阪の昔話」編集委員会：読みがたり「大阪のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 32) 兵庫県小学校国語教育連盟：読みがたり「兵庫のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 33) 奈良の昔話研究会：読みがたり「奈良のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 34) 和歌山県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「和歌山のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 35) 鳥取県小学校国語教育研究会：読みがたり「鳥取のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 36) 島根県国語教育研究会：読みがたり「島根のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 37) 岡山県小学校国語教育研究会：読みがたり「岡山のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 38) 広島県学校図書館協議会：読みがたり「広島のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 39) 山口県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「山口のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 40) 「徳島のむかし話」編集委員会：読みがたり「徳島のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2006
- 41) 香川県国語教育研究会：読みがたり「香川のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 42) 愛媛県教育研究協議会国語委員会：読みがたり「愛媛のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 43) 土佐教育研究会：読みがたり「高知のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 44) 福岡県民話研究会：読みがたり「福岡のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 45) 佐賀県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「佐賀のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 46) 長崎県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「長崎のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 47) 熊本県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「熊本のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 48) 大分県小学校国語教育研究会：読みがたり「大分のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2004
- 49) 宮崎県民話研究会：読みがたり「宮崎のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 50) 鹿児島島のむかし話研究会・鹿児島県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「鹿児島島のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 51) 沖縄昔の会：読みがたり「沖縄のむかし話」日本標準郷土文化研究室 2005
- 52) 林 鎮代「象徴としての「鬼」と「トッケビ」」関西国際大学研究紀要第12号 2011
- 53) 羽仁進・文、赤羽末吉・絵「やまのおろち」岩波書店 1967
- 54) 松居直・文、赤羽末吉・絵「ももとうろち」福音館書店 1965
- 55) 崔 吉城：「韓国のトッケビ」東洋経済日報（随筆）2010（10月15日）
- 56) 関敬吾：著「日本昔話大成6」角川書店 1978
- 57) 浜田廣助：「泣いた赤おに」偕成社 1965
- 58) あまんみちこ：「おにたのぼうし」ポプラ社 1969

「読みがたり」に登場する“鬼”

- 59) 稲田浩二・稲田和子編：「日本昔話ハンドブック」三省堂 2001
- 60) 柳田国男：「日本の昔話」新潮文庫 1983
- 61) 柳田国男：「日本の伝説」新潮文庫 1977
- 62) 民話の研究会編：「日本の民話15（九州地方2）」世界文化社 1977
「一寸法師」が収録されているが、「桃太郎」のようにキビ団子を持って出かけ「地獄めぐり」のように“鬼”の鼻の中で暴れる話。
- 63) 河合隼雄：「昔話と日本人の心」岩波書店 1982